

## 〈凡庸人〉登場

—Mr. Bloom の Characterization について—

田 中 英 史

### 目 次

はじめに	13
1. 〈凡庸人〉、〈全面人〉、〈普遍人〉	14
2. Characterization の手法	17
3. “Trinity” のなかの Bloom	22
4. 〈普遍〉への志向	27
あとがき	30

### はじめに

Leopold Bloom 氏——38才，ユダヤ系のダブリン市民で，職業は新聞社の広告取り。ソプラノ歌手の妻と15才になる娘をもつ。——*Ulysses* の主人公であるこの人物がいわゆる〈平凡人〉，〈凡庸人〉であることはひろくみとめられているところである。*Ulysses* は，テーマにおいて，また手法やスタイルにおいて，怪奇なまでに複雑な相貌をもった作品であるが，この主人公に着目すれば，それは，ひとりの平凡な人物の1日の意識や行動をあとづけ，かくて〈凡庸人〉のすがたを内面から，また外面から，さまざまに照射の光をあててうかびあがらせた小説であるとすることもできるのである。

〈平凡人〉，〈凡庸人〉を主人公にした小説はもちろん他にもたくさんあり，さらに，作者がそのことをかなり意識していたとおもわれる例もないではない。イギリス小説のなかで，古くは，たとえば *Tom Jones* における Fielding にすでにそういう意識の萌芽がみられるし，くだって Thackeray の *Vanity Fair* には “A Novel without a Hero” というサブタイトルがついていることから，そうした方向への作者の意図があることがうかがわれる。そして，19世紀後半のフランスの自然主義はその傾向をさらに決定的におしすすめ，20世紀にはいれば，世界各国の文学のなかで

そうした例は枚挙にいとまがない。むしろ今世紀の小説（べつに小説にかぎらないが）のほとんどは〈凡庸人〉をとりあつかったものといってよからう。なかでも Sinclair Lewis の *Babbitt* などは，現代のアメリカ人の典型を描いたものとしてよくあげられる例である。また英米文学以外では，R. ムジールの『特性のない男』などはこの点に関して特殊な意味をもつ作品であろうし，そもそも日本の私小説もあきらかに同様な方向のうえに成り立っているものである。

こうした〈凡庸人〉をとりあつかうというのは，romance から脱却した novel なるものの必然的にもつ性格であったともいえるし，その必然の性格が，現代にいたって社会の全般が “mass の様相” を濃くしてゆくにつれてますます顕著にあらわれるようになったのだ，と概観することもできよう。S. O’Faolain<sup>1)</sup> によるまでもなく，小説における “hero の消滅” の現象はひろくみとめられる。しかし，そのなかにあって，*Ulysses* ほど意識的に，また正面切って，この〈凡庸〉ないしは〈凡庸人〉の問題をあつかった作品はないとおもわれるのである。そこでは，〈凡庸人〉は単なる素材にとどまらず，まさにテーマそのものなのだ。〈凡庸人〉の登場が十全の意味においてなされたのである。O’Faolain のいう “hero の消

1) Sean O’Faolain, *The Vanishing Hero* (1956)

減” もここにきわまったということができよう。この点にわれわれは、*Ulysses* の新しさないしは意義の大きな部分がかかっていたのだとみたい。

このようないちじるしい特色をもつ *Ulysses* において、その主人公である Bloom の創造・描写は、それでは、具体的にはどのようになされているのか？——Bloom に関して Joyce の用いた characterization の手法を分析し、Bloom の〈凡庸〉の実態を考察すること——それが本稿の目的である。

Bloom はまた、一介の〈凡庸人〉であるにとどまらず、同時に象徴的・普遍的な意義づけもされて、その結果 “everyman” になっていることもひろく指摘されている。小説において、うえにのべたように〈凡庸人〉の〈凡庸〉そのものをテーマにするということは、要するに典型的な〈凡庸人〉を描くということであり、それは必然的に、彼を普遍的の相のもとで見、彼に象徴的な意義を賦与するということになるのではないか。——われわれの論考はここから出発し、*Ulysses* において、〈凡庸人〉を普遍的の相のもとで見ることが具体的にはいかになされているのかを主として考察することになる。そしてその過程で、〈凡庸人〉ないしは〈凡庸〉の問題についても、なにか新しい照明をあてることができないかどうか、試みることにしたい。

#### 1. 〈凡庸人〉、〈全面人〉、〈普通人〉

“Everyman” というのは、たしかに、Bloom を全体として評するものにもっとも 適切なことばであるようにおもわれる。このことばにあたる適切な日本語はないようであるが、それはすくなくとも、具体的・現実的なレベルにおける〈凡庸人〉の概念と、抽象的・象徴的なレベルにおける〈普通人〉とでもいうべき概念との両極をふくみ、それらを統合・止揚したところに成立する人物像をさすものとしてよいであろう。あるいは、すぐあとでべるような〈全面人〉(“complete allround man”) の概念をもふくむものとしてよいかもしれない。1 語にしてそうした複雑な内包をもっている——“everyman” というのはこのよ

うに便利なことばなのである。ところが、それがかえって仇になって、Bloom を “everyman” であると評するとき、そこにふくまれるさまざまな側面を安易に混同したまま見すごす傾向がなきにしもあらずのようである。“Everyman” Bloom のなかに存在するとおもわれる諸側面を一度はできるだけ区別して考えることが有意義であろう。われわれはここで、それらの諸側面をうえにあげた〈凡庸人〉、〈全面人〉、〈普通人〉という名で呼ぶことにし、まずそれらの側面のひとつひとつがたしかに存在することをもうすこしくわしく見ておこう、作者 Joyce の意図をも考慮しつつ。

Bloom が〈凡庸人〉であることはいまさらいうまでもない。社会的地位も卑小であるし、彼の存在はなにか極端な特性によってバランスがくずれているといのではなく、おおむね中庸をたもっている。社会的にも性的にも疎外されているところが多く、cuckold でもあること、英雄的な行動者のタイプではなく、どちらかといえば受動的な観想者であり pacifist であること、一種の fatalism を根底とした人生観をもっていること、文化的にはディレッタントであること……多くの論者が指摘するこれらの特徴は大体において読者のペーソスをさそい、それらは全体として Bloom の〈凡庸〉の実質をなしている。

もっとも、Bloom に異常な面がまったくないわけではない。動物の内臓をこのんで食べるという食物の嗜好、すでに10年以上も正常の交渉がとだえている夫婦関係、さらに彼の意識下にひそむマゾヒズム的傾向——これらがよく指摘される Bloom の〈異常〉である。しかし、こうした〈異常〉をふくみながらも彼が全体として〈凡庸〉な印象をあたえることは否定しえない。彼の〈異常〉も決して彼の〈凡庸〉のワクを破るものではないのだ。

Bloom を〈凡庸人〉たらしめようとした意図について Joyce 自身直接的に明瞭にのべたことばはないようであるが、そうした意図があったこと自体は疑いえないであろう。“A writer should never write about the extraordinary. That is



for the journalist.”というのが彼の持論であったし、無名の人たちとまじわりながら、“I’ve never met a bore.”と言った Joyce、さらに自分のことについても、“Don’t make a hero out of me. I’m only a simple middle-class man.”と言ったことがつたえられている<sup>2)</sup> Joyce であるから。

つぎに、〈全面人〉の側面について。

*Ulysses* が Homer の *Odyssey* を下じきにしてなりたっている作品であり、その主人公である 20 世紀のダブリン市民 Bloom が、古代ギリシアの伝承中の英雄 *Ulysses* に擬せられていることは、これまたあらためていうまでもない。そして Joyce が子供のころから *Ulysses* に引かれていたことも、‘Your Favorite Hero’ という題をあてられて書いた作文にこの人物をとりあげたとつたえられることから知られる。こうした *Ulysses* に対する彼の興味と共感はその後も強まることはあっても減退することはなく、ついにはこうして Homer を下じきにして自分の最大の作品のひとつを構想するまでにいたったのである。

ところで、この *Ulysses* に対する Joyce の熱烈な共感と関心の理由は、Frank Budgen のつたえる例の Joyce 自身のことば<sup>3)</sup> によってあきらかである。すなわち Joyce は *Ulysses* の “complete all-round character” であるところに魅力を感じているのであって、彼がいかに “all-round” で “complete” であるかということ、 “Ulysses is son to Laertes, but he is father to Telemachus, husband to Penelope, lover of Calypso, companion in arms of the Greek warriors around Troy and King of Ithaca.” 以下熱っぽく説いている。たしかにトロイ戦争後も長年にわたって地中海の果てから果てまで（これは当時にとっては世界の果てから果てまでということであった）漂流するよう運命づけられ、さまざまな経

験をかさねる *Ulysses* 以上に “all-round” な人物はいないであろう。

*Ulysses* になぞらえられている Bloom は、まず第一にこのような “complete all-round character” として設定されているのである。たしかに Bloom は *Ulysses* のもつさまざまな属性にあたるものをもっている（もっとも、たいていの場合には卑小化され、パロディ化されたかたちで）し、現に作中で、彼の知人の Lenehan が彼のことを “a cultured all-round man” と評している（p. 235）<sup>4)</sup> のがみられる。さらに第 12 挿話では、例の無名の話者が彼を “Mister Knowall” と揶揄している（p. 315）。かくて、〈凡庸人〉であるところの Bloom はまた同時に〈全面人〉でもあるのだ。彼の性格を論ずるときにこの事実を見おとすことはできない。

Bloom という主人公の創造にあたって、Joyce はこのように〈全面人〉をめざすところから出発した。そして同時に〈凡庸人〉に対する彼の共感・関心は、〈凡庸人〉としての属性も Bloom にあたえずにはおかなかったのだ、とみることができよう。〈凡庸人〉と〈全面人〉——このふたつは理論的にはもちろんおなじものではなく、一見してむしろ矛盾するところのほうが多い概念であるとおもわれる。その矛盾するふたつの側面がたくみに、そして微妙に融合されて、一個の人物をかたちづくっているのだが、ここでわれわれは、じつは Bloom は〈凡庸人〉であるからこそこうした〈全面人〉にもなりえているという一種逆説的な真理に気づかされるのである。それは、逆にいえば、〈全面人〉であるからこそ〈凡庸人〉にとどまらざるをえないということでもある。

Bloom をこのように〈全面人〉として設定したのは、本来〈凡庸人〉である彼を〈普遍人〉のレベルまで昇華させるための一手段であったとみることでもできそうであるが、それはまたこの節のおわりでふれることにする。

つぎに、〈普遍人〉の側面について。Joyce の

2) Richard Ellmann, *James Joyce* (1965 年の A Galaxy Book 版), p. 5

3) Frank Budgen, *James Joyce and the Making of Ulysses* (Indiana University Press 版), pp. 15-7

4) 本稿では、*Ulysses* からの引用は 1961 年の Modern Library 版による。



なかに〈普遍〉をもとめる志向がじつに根づよく存在し、それが彼の大きな特色のひとつになっていることは、これまたあとでふれなければならないが、この Bloom という人物の創造においても、そのことはあきらかにうかがわれる。ここではひとつだけ、それを例証する重要な事実に注目しておこう。

つまり、ダブリン市民 Bloom がユダヤ人として設定されている事実である。第2挿話で Deasy 校長も Stephen に、“Ireland, they say, has the honour of being the only country which never persecuted the jews....Because she never let them in.” (p. 36) と言っているが、アイルランドにおけるユダヤ人というのは特異な存在であるはずである。すくなくともダブリンの〈凡庸人〉がユダヤ人である必然性はない。しかもこのユダヤ人の問題は、*Ulysses* のなかに単なる偶然によってまぎれこんだ不協和音とみられるようなものではなく（そもそもこの作品中には計算されつくしてない部分や要素はまったくないといっていいほどなのだが）、この Deasy 校長によって作中ではじめてたたかれたキー・ノートは、主人公 Bloom から切りはなせないものとして、彼の1日の行程のさまざまな段階でくりかえしくりかえしあらわれるものなのだ。第4挿話には、Bloom が自己の属する民族とその父祖の地イスラエルについて内心に喚起するイメージがあるし、彼のまわりの人びとの彼を見る眼にはどうしても、ユダヤ人に対するときの一種特別な光がまじりこむことはさけられない。そしてこの問題に関するクライマックスは、第12挿話の酒場のシーンで、Bloom がそこにいあわせて彼への反感をつのらせてきた数人の市民たちからのがれるとき、彼らにむかってつぎのようにさげぶところである。

— Mendelssohn was a jew and Karl Marx and Mercadante and Spinoza. And the Saviour was a jew and his father was a jew....Your God was a jew. Christ was a jew like me. (p. 342)

Joyce がユダヤ人に対して同情的であり、anti-

semitism に反感をもっていたこと、そして彼のユダヤ人に対する興味はちょっとなみはずれて大きなものであったことはよく知られているところである。

*Ulysses* の主人公がこのようになぜユダヤ人でなければならないかという問題もすでに十分に論じつくされているようだ。重要なポイントは、ユダヤ人がもっとも疎外された民族であるということであろう。つねに疎外され frustrate されているというのは、すでにふれたように Bloom の性格の重要な特質をなしているのであるが、そこには彼がユダヤ人であるということも閑却できない原因をなしている（とくに疎外が社会的なものである場合に）。

当面のわれわれの問題——〈凡庸人〉の側面と〈普遍人〉の側面を区別する観点からすれば、Bloom をユダヤ人に設定したということは、この後者の側面を強調するはたらきが強いとおもわれる。Bloom のおかれている疎外状況はけっして彼ひとりの場合のみのものではなく、それは本質的にはすべての人間存在に共通であり、歴史のすべてをおおいうるほどに大きく遠いひろがりをもった問題であるという側面、つまり〈普遍人〉にかかわる側面を強調しているのだ。Homer の *Ulysses* は地中海世界を20年間にわたって漂流した。Bloom はダブリンという小世界(?)をたった1日さまよい歩くにすぎない。ところがこの Bloom の背後には、彼の属するユダヤ民族の2千年にわたる漂泊の歴史がひかえているのだ<sup>5)</sup>。ユダヤ民族2千年の歴史がこの作品で意味するところのもの——それこそ Bloom の〈普遍人〉としての側面の強調にほかならない。

また、ユダヤ民族の血をひいている Bloom はアイルランド人というよりはむしろ人類のひとりとしての cosmopolitan の面をより強くもっているということがあって、それも彼の〈普遍人〉としての印象をささえる要因になっているのである。彼はせまい国境の観念にはしばられず、当時

5) R. C. Churchill, 'The Age of T. S. Eliot' (George Sampson, *The Concise Cambridge History of English Literature* の最終章) 参照。



アイルランドに顕著であった偏狭で熱狂的な愛国思想に単純にくみすることはできない。彼の説くところはむしろ人類共通の福祉であり、憎悪の原理ではなく普遍的な愛の教理である。さきほどもふれた第12挿話の居酒屋のシーンで、排他的で熱狂的な愛国主義者である‘Citizen’たちと論争をし、彼らの反感を買う Bloom のすがたにこのことはもっともよくあらわれている。Exile として生涯のほとんどを他国にすごした経歴をもつ Joyce 自身が、ここに反映しているのである。Bloom は表面上は exile ではないけれども、彼の属する民族の宿命によっていわば先天的な exile であるのだ。

このように、〈凡庸人〉、〈全面人〉、〈普遍人〉は、Bloom の性格を構成する3つの側面である。それらはたがいにかかなりの程度にかさなりあうことはもちろんであるが、完全にオーバーラップするものでないこともたしかであって、3者は微妙にズレあいながら、また微妙に影響しあっているのだ。

そうした3者の関係は、やはり次元の高下としてとらえるのがよいかもしれない。そもそも本節の冒頭でわれわれは、具体的・現実的な凡庸人のレベルと、抽象的・象徴的な〈普遍人〉のレベルとを設定して考察をはじめたのだが、そのことをここでもう一度確認しておこう。

*Ulysses* には realistic—Homeric—esoteric といった3つのレベルの意味が同時に存在していることが一般にみとめられているが、これらのレベルは、Bloom の性格について見れば、それぞれ〈凡庸人〉、〈全面人〉、〈普遍人〉の側面に対応するものとして、大きなあやまりはないであろう。この場合、〈凡庸人〉である Bloom は、〈全面人〉であるというレベルを仲だちにして、〈普遍人〉の意味をも賦与されている、と考えることができる。

あるいは、〈凡庸人〉と〈全面人〉とを同等に〈普遍人〉の下位概念としてもよいかもしれない。〈凡庸人〉が、〈普遍人〉の属性をできるだけ切りつめていったときに抽出されてくる“万人に

共通な”といういわば最大公約数的な概念であるのに対して、〈全面人〉は、〈普遍人〉の“万人を包含する”という方向におけるいわば最小公倍数的な概念であるということができよう。〈凡庸人〉と〈全面人〉という、こうした正反対な方向の統一・止揚であるもの——それが〈普遍人〉なのだ。

とにかく Bloom の性格には、こうした二重三重の面がふくまれていることはたしかである。彼はそれらを一身に融合・体现している人物なのである。一見単なる〈凡庸人〉に見える Bloom の性格の複雑さ・奥深さ・豊かさの秘密はここにあるのである。このように、〈凡庸人〉は同時に〈全面人〉であり、したがって〈普遍人〉であるという認識、逆にいえば、〈普遍人〉は必然的に〈凡庸人〉でなければならないというアイロニカルな認識——それが *Ulysses* における大きなポイントのひとつであろう。

われわれは〈凡庸人〉Bloom という先入主にひきずられて(?)、この1904年6月16日という日を何の変哲もない平凡な1日だとしてかたづけてしまいやすい。しかし、たとえば Budgen も指摘している<sup>6)</sup>とおり、そこには死と誕生をはじめ、人生における重大事はすべて顔を出しているのである。よく見てみれば、Bloom 個人にとっても、朝から晩まで多事な1日であった。こうした一見平凡な1日が、人間にとって普遍的な意味をもつすべての重大事をふくむものであること——それもこのような *Ulysses* のあたえるメッセージの一面である。

## 2. Characterization の手法

前節では、Bloom の性格について、どちらかといえばその“内実”に注目してきたのだが、一般に作中人物の読者にあたえる印象は、当然のことながら、彼を描き出す手法そのものによるところも非常に大きいのであって、そのことはこの *Ulysses* の場合とくにいちじるしいようにおもわれる。スタイルの面でも手法の面でも驚嘆すべき

6) Budgen, p. 73

試みをつみかさねていることがこの作品の大きな特質でもあるからである。ここでは、それらの手法が Bloom の characterization にどのようにかわってくるか——前節にのべた彼の〈凡庸人〉、〈全面人〉、〈普遍人〉の側面のどれをどのように強調する役割をはたしているか——をみようとおもう。

まず、これは手法そのものとはいえないかもしれないが、モデルの問題について。

Bloom の有力なモデルとして、Joyce の友人や知人の名が何人かあげられている<sup>7)</sup>が、なかでも重要なのは Hunter というダブリン人であったらしい。Joyce もいくらかは顔見知りであったこの人物は、Bloom 同様ユダヤ系で、妻を寝とられたという評判があったという。そして Joyce はつとに 1906 年にこの人物をモデルに 'Ulysses at Dublin' という短編を *Dubliners* の 1 編として書こうとしたこともあり、それは結局挫折したのであるが、そのもくろみはしだいに Joyce の心のなかで成長して、ついに *Ulysses* という作品に結実したのであることが知られている。この Hunter 氏を中心的な原型にし、そして彼を Ulysses に擬して——と、これで Bloom 生成のための背骨はできあがったのであり、その背骨のまわりに他のさまざまなモデルによる肉づけがされて、Bloom という人物が創られていったのであろうとは、衆目の一致するところである。ここで、本稿の観点から重要なのは、Bloom のモデルは、Ellmann がまとめて列挙しているような特定の何人かにかぎらず、じつはだれであってもよかったのだ（すくなくとも理論的には）ということである。Joyce はまわりの人間のだれかれから Bloom の性格の細目やそのヒントをうることができたのである。〈凡庸人〉であり〈全面人〉であり〈普遍人〉である Bloom は、それをもっともよく許容しうる人物のはずであるし、あとでのべるような“断片の集積”という手法もまたそのことを容易ならしめたであろうから。

こうした他人をモデルにしたという面ばかりでなく、Bloom の性格のなかには当然作者である Joyce 自身の性格・特質も強く反映されていることもまた指摘されている。両者の気質に類似点が多いという基本的な事実のほかに、もっとも顕著なものとして、Bloom の内面独白のなかには〈凡庸人〉たる彼には不似合いなほどの詩的美をそなえたイメージの喚起が多いという事実があげられよう。Ellmann は、第 4 挿話からいくつかの例をあげている<sup>8)</sup>が、他にたとえば第 5 挿話最後の一節（これから入浴しようとしている Bloom の思いうかべるイメージ）もじつに詩的である。

Enjoy a bath now: clean trough of water, cool enamel, the gentle tepid stream. This is my body.

He foresaw his pale body reclined in it at full, naked, in a womb of warmth, oiled by scented melting soap, softly laved. He saw his trunk and limbs rippled over and sustained, buoyed lightly upward, lemonyellow: his navel, bud of flesh: and saw the dark tangled curls of his bush floating, floating hair of the stream around the limp father of thousands, a languid floating flower. (p. 86)

*Lotus-eaters* の章を閉じるにふさわしい、なまあたかくものうげな美しさに富んだ一節である。このように作者 Joyce がみずからのすぐれた想像力を Bloom にも分有させることが自由にできたのは、Bloom が単なる〈凡庸人〉ではなくて、〈全面人〉、〈普遍人〉の側面をもあわせもつ人物として設定されていたからであろう。

つぎにいいよ、本来の characterization 上の手法をみることにして、まず、Homer を下じきにしたという手法について。これについてはすでに前節でもふれて、Bloom を Ulysses に擬すことは、彼を〈全面人〉に設定することでもあるのをみておいたが、これは他方においてはパロデ

7) Ellmann, pp. 385-6 参照。

8) Ellmann, pp. 372-3



ィの手法、つまり、神話と現実、Ulysses と Bloom の対照という手法でもあることはもちろんである。そしてこのパロディの手法には、多くの論者が指摘しているごとく、2つの機能があるとおもわれる。ひとつは、Ulysses に擬せられた Bloom のニセの英雄としての卑小さ・こっけいさを浮き出させるという機能であり、他のひとつは、それとは正反対に、そうした“domestic”<sup>9)</sup>で“inglorious”<sup>10)</sup>な人物に古代の英雄のような大きさ・偉大さ・普遍性をあたえる機能である。前者はすなわち〈凡庸人〉としての Bloom の強調であり、後者は〈普遍人〉としての彼の強調である。

かくて、この Homer を下じきにするという手法は、Bloom のうちの〈凡庸人〉、〈全面人〉、〈普遍人〉のすべての面を浮き出させる機能をもっていることになる。この手法は Ulysses 全体の、そして Bloom の characterization の、いればワク組みをなすものとしてもっとも重要な位置をしめるものなのだが、Bloom の性格の多面性と統一、矛盾と止揚とは、すでにこの手法自体から出てくるものであるのだ。

つぎに、“意識の流れ”（内面独白）の手法についてはどうであろうか？ この手法がべつに Joyce の独創でないことは彼自身もみとめているし、それはある意味からすればほとんど小説の歴史とともに古いとさえいえそうなのであるが、それを意識的に駆使し、それに重要な意義をあたえたのは彼をもってはじまりとするといってもよからう。この手法は Ulysses においては、Bloom ばかりでなく他の登場人物たちについても用いられて、作品中でじつに大きな重要性をもっているのはいうまでもない。これが Bloom の characterization におよぼす影響はなんであろうか？

伝統的な、外からの人物描写では、ある人物を浮き出させるためには、その人物の性格のななか

らもっとも特徴的なものを選び出すのだが、この内面独白の手法は人物の内面の意識の流れをできるだけ忠実に再現することをむねとするので、そうした選択はほとんどなされなくなる。もちろん芸術作品であるからには、つねになんらかの選択はなされているはずであるが、この場合はすくなくともそうした選択のあとが読者に見えてはならないのである。作者による意識的な選択のあとが表面に出てしまえば、それは“意識の流れ”としてのリアリティをうしなってしまう。そういうわけで、この手法はすくなくともたてまえのうえでは、当該人物の意識中に生起するすべての現象——思考・想像・追憶等——を記録することになる。こうして描かれた人物の内面は当然混沌たる様相を呈してくるが、これは大ざっぱに言って、彼を〈凡庸人〉に見せる効果をもつのではないか。〈凡庸〉とは、平均とか標準とかいう仮定の一線のまわりに混沌としてわだかまる不定形のなものかであるからだ。“意識の流れ”の手法には、それをあてはめられた人物を多少とも〈凡庸人〉に近づけるようなはたらきがあるのではないだろうか？ それはともあれ、われわれが Bloom のなかにみる思いがけないほどの多様と豊饒は、この手法によって生み出されたところが大きいのである。

この手法は、一面において、〈凡庸人〉の描写にもっともよく適するのではなく、むしろ Faulkner などにみられるごとく、異常心理の描出にこそその威力を発揮するところが多いものとみるべきかもしれない。しかしそれでもこの手法は、Ulysses において、それによって描き出された Bloom の内面が、おなじ手法によってあきらかにされた他の人物（とくに Stephen）の内面と対置・対照されることによって、〈凡庸人〉としての Bloom のすがたがいっそう鮮明にうかがえてくるという、いわば間接的に〈凡庸人〉の側面を強調するはたらきをしていることはわすれてはならない。次節でまたふれるような Bloom と Stephen の対照は、彼らふたりの“意識の流れ”を比較対照することによって、もっともよく明確にさせられるのである。

9) W.Y. Tindall, *James Joyce* (Charles Scribner's Sons), p. 27

10) Harry Levin, *James Joyce* (1960年の A New Directions Paper Book 版), p. 66



つぎに、“断片の集積”という手法——Ellmann のことばを借りれば，“a synthetic method, the construction of character by odds and ends, by minutiae”<sup>11)</sup>という手法——についてはどうであろうか？

この手法は Bloom の characterization の一大特色をなしている。Bloom の性格づけはさまざまな断片的な小事実——伝統的な小説においてはとりあげられることのなかったような小事実——の集積のうえになりたっている。われわれは彼について——現在の彼ばかりでなく過去の彼についても——のあらゆる微細な具体的な小事実を知る。現存する世界の小説のあらゆる登場人物のなかで、彼ほど読者に知りつくされる者はないとされるゆえんである。

友人や知人との談話などにおいて、ちょっとおもしろいことばや事実を知ると “I’ll use it.” とただちにそれを書きとめ、あとで作品のなかに組み入れるのがつねであったという Joyce の制作態度に関する話はいくつもつたえられている。こうした手法の当然要求する書きかたであるといえよう。

この手法が Bloom の characterization に対してもつ効果は一見してあきらかである。それは、うえにのべた“意識の流れ”の手法と同様に、〈凡庸人〉としての Bloom の印象をつよめ、同時に彼の〈凡庸〉の内実が意外なほどの変化と多様と豊饒とを内包することをしめすという、二重の機能をはたしているのである。

画家でもあった Budgen は、*Ulysses* のなかの内面独白が impressionistic (印象派的) だといっている<sup>12)</sup>が、たしかにそれはとくに点描法に通ずるところがあるであろう。つまり、その内面独白(“意識の流れ”)は、うえにのべた“断片の集積”の手法でうめられているということである。個々の断片・細目のそれぞれが、全体として Bloom 像を描いている画面の点のひとつひとつにあたるわけである。

最後に、Bloom の性格の描写があらゆる観点からなされているという手法について。Bloom という人物は、その外面的な行動の面から、あるいは内面独白を通して意識の面から、さらには社会的な面と生理的な面から、といったふうに、ほとんどあらゆる観点からながめられている。Joyce は omniscient (全知)な視点を採用しているのであるが、それは一面的ではなくてこのように重層的な omniscience なのである。

そのなかで、Bloom が〈凡庸人〉であるという最終的な印象をもたらすのにとくに大きな役割をはたしているとおもわれるのは、彼の生理的な側面に非常に大きな注意がはらわれているということである。Bloom がはじめて登場する章である第4挿話は、彼の食物の嗜好、および台所で朝食のしたくをしている彼のすがたの紹介ではじまる。そしてこの挿話の終りには彼の排便のシーンが出てくる。このように、Bloom 導入の章であるこの挿話が人間のもっとも基本的な生理現象への言及ではじめられ、そして閉じられているのは、Bloom という人物および彼を描き出す手法を象徴しているものとして重要な事実である。そのほか第11挿話での放屁、第13挿話での射精、第17挿話での放尿など、Bloom の生理的側面をあつかった個所は、やはり異彩をはなっている。Tindall の “No author has rendered the effect of body upon mind more profoundly or more happily expressed their agreement.”<sup>13)</sup> という評はまさにそのとおりなのであって、うえにあげたような個所をくわしくみるのをスペースがゆるさないことが残念におもわれるほどである。H.G. Wells は、Joyce には “cloacal obsession” があると評したが、それは言いすぎで、Joyce はただ生理的側面のとりあつかいを、それが人間生活全体のなかにしめる本来の比重にまでひきもどしたにすぎないのである。しかし従来の観点からすればこの生理的側面が異常に強調されているとみえることも事実であって、したがってこれは Bloom の〈凡庸人〉としての側面を強く印象づけるはた

11) Ellmann, p. 368

12) Budgen, pp. 91-2

13) Tindall, p. 43



らきをはたしているといえよう。

一方、この生理的側面は、そこにかかなりの差異や個性の存在はみとめられるにしても、万人に共通なものであって、したがって主人公の生理的側面を重視することは彼の〈普遍人〉の印象を強めるはたらきをするであろう。そして *Ulysses* において、生理的側面は Bloom のそれだけが強調されているのではない。たとえば第8挿話にはものを食う人間たちの動物的なみにくさ、生理的嫌悪感をさそうようなすがたが印象的に描かれている。こうしたところは吉田健一氏が指摘する<sup>14)</sup>ように、世界や人間を泥、dust とみる Joyce のカトリック的感性のしからしむるところかもしれない。いずれにせよ、この場合にかぎらず、Bloom のあたえる印象はまわりの人間すべてのあたえる印象にささえられているところもあるのはたしかである。彼が〈凡庸人〉であるのは、ひとつには彼の住む世界が〈凡庸〉であるからなのだ。

“重層的全知”の視点の一環をなすものとして、生理的側面の重視とならんでみのがしえないものは、第15挿話における Bloom の意識下の世界の探求であろう。‘Nighttown’における Bloom の幻想を戯曲まがいに仕立てたこの挿話は、分量の点でも他の挿話のどれよりも長いのであるが、そこになされている試みもそのユニークさにおいてもっとも注目すべきものとされている。

さらに、このような直接的に彼の内面を露呈させるという手法ばかりでなく、他の登場人物の観察・意見を通して Bloom の性格を浮き出させるという間接的描写の方法もつかわれている。たとえば第8挿話では、Bloom は知人の Nosey Flynn と Davy Byrne のうわさ話のなかで多少の皮肉をこめて “decent quiet man” とか “a safe man” と評されている (p. 178) のがみられるし、第10挿話では、やはり Bloom の知人である Lenehan と M'Coy が彼のうわさ話をしている、Lenehan が “He's a cultured allroundman, Bloom is,...There's a touch of the artist

about old Bloom.” と評している (p. 235) ことは、すでにふれたとおりである。また Marion や Stephen の Bloom 観<sup>15)</sup>はそれらよりもはるかに重要なものとして作中に存在する。こうした間接的描写の方法もやはり“重層的全知”の視点の一環をなすものとしてよいであろう。

こうした視点を採用して描き出される人間の像は、総体として、Daiches のことばを借りれば、“heroic and trivial, splendid and silly, important and unimportant”<sup>16)</sup> といった、たがいに矛盾する両極の性質をあわせもつという印象をあたえる必然性をもつことは当然である。(こうしてこの視点は、さきにのべた Homer を下じきにする手法と同様な機能をもつことになる。) Bloom の性格の総体としての評価は、われわれ読者としても単純にはなしえないのだが、それはこのようにそもそも Joyce 自身の Bloom に対する態度から由来するのだ。

Joyce は Bloom を尊敬すべきところと同時に軽蔑すべきところもある人間として、あるいは愛すべきところとともに嫌悪をもよおさせるところもかねそなえた人間として見ているのである。こうした Joyce の見かたの ambivalence を、たとえば Levin は “irony and pathos” とし<sup>17)</sup>、R. S. Ryf は “jocoserious” ということばで説明している<sup>18)</sup>。あるいは Tindall のように、“Attached by understanding and detached by art, Joyce presented Bloom with irony and compassion.”<sup>19)</sup>と、感情・心性上の態度と手法から由来する態度とをわけてかんがえることも可能かもしれない。要するに Joyce は Bloom を可能なかぎり客観視しようとしているので、そこに出てくるのはまったく相対的な人間観なのだ。登場人物からの作者の aloofness ないしは detachment はもっとも極端になされているといえよ

15) それは次節においてふれることにする。

16) David Daiches, *The Novel and the Modern World* (Phoenix Book 版), pp. 5-6

17) Levin, p. 124

18) Robert S. Ryf, *A New Approach to Joyce* (University of California Press), p. 203

19) Tindall, p. 35

14) 吉田健一『英国の近代文学』(垂水書房) p. 250 以下



う。ひとりの人間——とくに Bloom のような〈凡庸人〉——には単純で直接的な価値判断をおしつけることはできないのだ、〈凡庸人〉は同時に〈全面人〉でもあり〈普通人〉でもあるのだから、というのが Joyce の根本的な態度であろう。こうして、この〈凡庸人〉Bloom は第12挿話ではモーゼやエリヤやキリストにさえもなぞられ、第17挿話の終りの部分では、全体のふんい気が宇宙的に拡大してゆくにつれて、彼もまた宇宙的な次元に解体してゆくのだとみられるのである。

以上、Bloom の characterization の手法について、いくつかとくに顕著なものをみてきたが、さきにもちょっとふれたように、それらのあいだにはやはりレベルのちがい（高下）があるようである。いまそのことをかんがえてみるならば、Homer を下じきにした手法と重層的 omniscience の視点とはもっとも高次のレベルに属するものであって、両者あいまって Bloom の characterization のワク組みないしは“構造”（structure）をなすであろう。そして、断片を集積するという手法はもっとも低次のレベルにあって、主としてその structure をうめる細目ないしは“組織”（texture）を供給する役割をはたすものとおもわれる。“意識の流れ”の手法はこれら2つのレベルの中間にあって、ワク組みともなるし、また細目を供給する役割をもはたしているであろう。

ここでわれわれの注意すべきは、大ざっぱにみた場合、低次のレベルの手法は Bloom の〈凡庸人〉の面を強調する役割をはたし、高次のレベルの手法は彼の〈全面人〉あるいは〈普通人〉としての面を強調するのに役立っているといえることである。〈凡庸人〉の〈凡庸〉そのものをテーマとしている、つまり典型的な〈凡庸人〉の創造をめざしているという *Ulysses* の特色は、〈凡庸人〉を単なる〈凡庸人〉としてでなく、〈普通人〉にまで高めることでもあったのはすでに見たところであるが、それはもう一度いいかえれば、その characterization において、うえにあげたような高次のレベルの手法——つまり、Bloom の性

格のワクづけとなるような手法——を考えつき使用したことであるのだ。現実的にはダブリンに住む一介の〈凡庸人〉にすぎない人物を Homer の *Ulysses* になぞらえる、そして彼をあらゆる観点からながめる——そこにわれわれは、Joyce の壮大な芸術的ビジョンの成立を見るのである。そして Joyce はまさにおどろくべくたくみな手法・技術をもってこのビジョンを確実に実体化している。そこに生まれたものがこの *Ulysses* という作品なのだ。

### 3. “Trinity” のなかの Bloom

*Ulysses* には、Bloom のほかに Stephen Dedalus と Mrs. Bloom という重要な人物が登場し、この3人が緊密な相関関係におかれて一種の“Trinity”（三位一体）をなしていることは言うまでもない。前節までにおいてわれわれは Bloom ひとりだけに注目してきたのだが、ここではやや視野をひろげて、彼をこの“Trinity”のなかにおいて考えてみよう。それはひとつには、Bloom と他のふたりとの比較対照をするということ——論述の便宜上前節ではふれなかったが、ここにはいわばコントラストの手法が用いられているとみてもよいのである——でもあるが、それによって Bloom の〈凡庸〉の内実ももうすこしあきらかになることが期待される。

まず、その Bloom と Stephen について。父 *Ulysses* に対する子 Telemachus として設定されている Stephen は、また、Bloom とはきわだって対照的な性格をもつ人物である。第17挿話の “What two temperaments did they individually represent?” の項目のもとでは、Bloom は “scientific” であり Stephen は “artistic” であるとされている。このふたりの対照はまた、たとえば Tindall は “extrovert” 対 “introvert” と規定し<sup>20)</sup>、Levin は Hebraism と Hellenism という大きな次元にまで拡大し<sup>21)</sup>（これらの割り切

20) Tindall, p. 48

21) Levin, p. 85



りかたはちょっと大ざっぱにすぎるとおもわれるが), Ellmann は前者の “common sense” と後者の “acute intelligence” を指摘し<sup>22)</sup>, 全体として Bloom は Joyce の “mature persona” であり Stephen は “immature persona” であると評価している<sup>23)</sup>。とにかくこのように, Bloom と Stephen のあいだに明瞭な対照関係がなりたっていて, 〈凡庸人〉としての Bloom の像をますます浮き出させるはたらきをしていることはあきらかなのである。

Stephen はたしかに 〈凡庸人〉ではない。なにがして彼を 〈凡庸人〉でなくせしめているのか? 彼の若さからくる偏狭さが根底にあることはたしかであるが, そのほかに大きなポイントはやはり彼が芸術家志望の青年であるということであろう。芸術家はやはり 〈凡庸人〉でありえない。たとえ外見はそうであっても, 彼がその内面にもつイメージやビジョン, そしてなによりも凡俗をぬけ出そうという本質的な向性が, 彼をして 〈凡庸人〉にとどまるのをゆるさないのである。Stephen はまだまったくの無名ではあるけれども, 彼のもつ芸術家たらんとする意思のはげしさが本質的に彼から 〈凡庸人〉たるの資格をうばっているということができよう。Stephen の内面世界をいどころ基調ともなっている彼の敏感で傷つきやすいプライド, おのれをみとめさせたいという欲求, そしてそれがみたされないための他人や世界に対する不満などは, すべてこの芸術家たらんとする意思から出ているといえるのである。

このように, Bloom と Stephen とが対照的な人物であるのはあきらかなのだが, 一方, ふたりのあいだには, 精神上の父と子にふさわしく, 否定できない共通の基盤もあるのである。それは Ellmann のことばを借りれば, ふたりともに “the philosophy of passivity in act, energy in thought, and tenacity in conviction” を共有するということ<sup>24)</sup>であるのだが, これは Joyce 自身のもつ特徴でもあった。そしてつづいて Ell-

mann は, このふたりのもつ “敵” にも注目して, “mental men” である Stephen-Bloom 対 “burly men” である Mulligan-Boylan という対立を指摘している<sup>25)</sup>。Joyce 自身は断然 Stephen-Bloom の味方であるのである。

Stephen はいうまでもなく一時期の Joyce のほとんど忠実な自画像であるといってよい。Joyce と Stephen のあいだの具体的な細目における類似は, Joyce と Bloom のあいだのそれとは比較にならず多い。しかし *Ulysses* において Joyce の心情的な同感むしろ Bloom のほうにかたむいているのは, 次節でもふれるごとくである。

とにかく, このように Joyce 自身の性格を分有している Bloom と Stephen とは, 彼のなかの両極端を代表するとみてよいわけであろう。したがって彼らのあいだの相違・対照は, Joyce のなかの対立・葛藤の体現にほかならない。そしてこの “父” と “子” の接触・交渉を通じて, 人間の疎外と愛による結合の可能性の問題という *Ulysses* の最大のテーマのひとつがさぐられているわけであるが, これを Joyce 自身に即した意味にひきなおしていると, Joyce はこの作品で自分の内部の二律背反の克服をめざしたということにほかならない。もっともこの作品全体にみられる Joyce の徹底した detachment, そして随所にひびく哄笑——そこから感得される Joyce のじつにしたたかな印象は, 彼が自己の内の二律背反になやんでいたなどというロマンチックでナイーブな見かたの可能性をほとんど完全になくなしてしまうようにおもわれる。しかし Bloom と Stephen の対照は, 多少ともこうした解釈を正当化する必然をもつであろう。ここでわれわれは, ふたりの接触・交渉のあとをいくらかくわしくたどることによって, Joyce の両極の統一がいかにか, どの程度までなされているかをみることにしたい。

Bloom は Stephen の父 Simon Dedalus とは一応まえからの知人同志であり, Bloom と Stephen も顔ぐらいは見知った仲である。第17挿話では, ふたりは以前に2回, Stephen が5才のと

22) Ellmann, p. 383

23) Ibid., p. 369

24) Ibid., p. 379

25) Ibid., p. 383



きと10才のときに会ったことがあることがあきらかにされている (p. 680)。そしてこの1904年6月16日、ふたりの接触は、第6挿話で、Dignamの葬式に列するため Simon をはじめ3人の知人たちと馬車に乗っている Bloom が、街を歩く Stephen のすがたを馬車の窓からみとめ、Simon にしめしてやるどころ (p. 88) から始まる。そのとき Simon のことばのなかにしめされる息子への愛情を瞥見したことによって、Bloom は生後間もなく死んだ自分自身の息子 Rudy のことを思いおこし、したがってここから彼の Stephen に対する父親的な感情 (まだそれほどはっきりと意識されたものではないが) が始まるのである。その後 Bloom と Stephen とはそれぞれの軌道のうえを動きながらもこの日何回か街のなかですれちがったり、触れあったりすることになる。第7挿話の新聞社のシーンでは Bloom が退場した直後に Stephen が現われることになっている (pp. 129-31) し、第9挿話の最後では Mulligan といっしょに図書館を出た Stephen の眼前を Bloom があいさつをして通り、Mulligan が Stephen に “The wandering jew, ... Did you see his eye? He looked upon you to lust after you. I fear thee, ancient mariner. O, Kinch, thou art in peril. Get thee a breechpad.” とささやく (p. 217) ことになっている。ふざけ半分ではあるけれども Mulligan も Bloom の Stephen に対する感情にふつう以上のものがあることを感じとっているわけである。第14挿話の A. Horne の産院のシーンでは、Stephen が Mulligan やその仲間の医学生たちとドンチャンさわぎをしているところへ Bloom が行きあわせ、Bloom のなかに Stephen を Rudy と同一視する気持が生まれて彼にますます親愛の情をおぼえるようになり、酔っぱらって仲間たちと ‘Night-town’ へ出かけた彼のことが心配なあまりあとを追う。‘Nighttown’ 以後ほとんどずっとふたりはいっしょであり、その間 Bloom は売春宿の女将に法外な金をまきあげられそうになった Stephen のためにその金をとりもどしてやったり、英国兵に言いがかりをつけられてなぐり倒された Ste-

phen を介抱してやったりする。そして第16挿話ではふたりで夜ふけの街を話しながら歩き、第17挿話では Bloom が Stephen を自分の家までつれてきて、宿の提供まで申し出るのであるが、結局 Stephen はこの申し出に応えることなく、しばらくののち別れをつげてまた夜の中へと立ち去る…

このようにふたりの関係は全巻を通して徐々に密接になり、結局それが実をむすばない形のままでおわるのである。この過程を通じて、相手をもとめるのはつねに Bloom のほうであって、Stephen はどちらかといえば不本意ながらこの関係にひきこまれたという形になっているのはおもしろいことである。それは pathetic な Bloom という印象を強め、したがって〈凡庸人〉としての Bloom の印象を強める。そして Bloom の期待に反して Stephen が別れてゆくという結末はさらにこの印象を強調する。“父と子”のテーマは Bloom と Stephen のあいだのそればかりではなく、*Ulysses* のなかにさまざまなあらわれかたをする重要な要素であって、Stephen にも“父”をもとめる志向は明瞭にみとめられるのだが、現実には彼は Bloom を“父”とかがえてみるそぶりをついにみせないでおわるのは、Bloom にとっては皮肉というほかない。

Edmund Wilson は、Stephen と Bloom の邂逅は Bloom に自信めいたものを回復させ、そして Stephen の話を Bloom から聞いた Marion にも影響をあたえているのがみられるので、その結果として、かなり不自然といわざるをえないままでの Bloom 夫妻の関係をもとにもどすのに資するだろうし、一方それは Stephen が自分の民族の生に思いをいたして *Ulysses* を書くようになるきっかけともなっている、という趣旨のことをのべて<sup>26)</sup>、この両者の接触のもつ意味を高く評価している。これはもっとも楽観的・温情的な解釈であるが、たしかにそうした解釈もできないわけではない。しかし、そういうふうに割り切ってしまうのは、むしろ *Ulysses* という作品全体の意図

26) Edmund Wilson, *Axel's Castle* (Charles Scribner's Sons の1959年版), pp. 200-2



にすぐわなくなるのではないだろうか？ これはたとえば Levin によってとられている考えかたである<sup>27)</sup>が、Bloom と Stephen の結合は結局完全には成功しなかったというふうにみるべきであろう。しかし、これは、Joyce が自分のなかの二律背反の解決に失敗したことを意味するなどという直線的なむすびつけのできるところではない。この作品全体にみられる Joyce の客観的な眼のしたたかさは、彼がそうした次元を高く超えたところにいたことをしめすのである。

つぎに、Marion について。Marion の存在は Bloom の characterization にどのようにかかわってくるのであろうか？

彼女も Bloom とともに第4挿話ではじめて登場する。しかしその後はずっと小説の前面からはしりぞいていて、第10挿話で断片的に彼女のすがたが瞥見されるほかはほとんど Bloom の内面独白において彼の意識の対象として浮びあがってくるだけであるが、最後の第18挿話全部が彼女の内面独白にあてられている。これは、一日の終りに寝床にはいつている彼女のとりとめのない、雲のごとく海のごとく変幻する不定形の意識の流れを、数十ページにわたって句読点をいっさいつかわない（最後の1つのピリオド以外は）スタイルのうちに定着しているあの有名な挿話である。

まず、Marion は夫 Bloom をいかに見ているのかを概観しよう。これは前節でのべた重層的 omniscience の手法の一環でもあるが、われわれは Marion の Bloom 観を知ることによって、Bloom の性格をさらによく知ることになるのである。

皮肉にも貞淑な Penelope になぞらえられている Marion は、実際には夫をしばしば裏切っている。きょうも自分の興行上のパートナーである Boylan との情事をもったばかりである。まえにのべたように、夫とのあいだの正常な関係を断ってすでにひさしい。こうした彼女が Bloom のことをそれほど高く評価していないのは当然であっ

て、夫に対する小さな(?)不満の種もいくつかある。たとえば、収入の不定ないまの職業をすててどこかべつのところで働いたらとかんがえたり (p. 752)、男らしくパイプでもふかしたら、などとおもったり (p. 752) するごとくである。全体として温和な Bloom に対する不満から、Boylan のような荒っぽく粗野な男にひかれるようになるのであろう。

しかし、こうした彼女も Bloom をけっして無視しきれないでいるのは、Tindall が “Although she sees through him as she sees through every man, she is puzzled by something in him that escapes her and demands her admiration.” といっている<sup>28)</sup>とおりである。浮気っぽい Bloom のことを半分あきらめながらも苦にしたり——自分のことはタナにあげて——する (p. 739) し、また “brainless” な彼女は知的な側面では彼に一目も二目もおいていることは、第4挿話で彼に “metempsychosis” ということばの意味をたずねる有名な個所があるごとくである。そもそもこの第18挿話をなす彼女の独白は、さきほど Bloom が床につくまえ、あすは自分のために朝食を用意してほしいと、いつもの習慣を変えるようなことを言いのこしたのをいぶかるところからはじまるのであった。そして、過去のさまざまな男たちとの交渉の追憶がいれかわりたちかわりあらわれるこの “意識の流れ” において、Bloom が最終的に勝利をしめる——Homer の Ulysses が最後に Penelope の求婚者たちを打ち負かすのになぞらえられて——のがみられることが指摘されている。Bloom の勝利へむかう転機は、Bloom の話した Stephen のことから、若い男や若い詩人へのあこがれ（彼らと寝たいという欲望）が生じ、それにひきかえ Boylan の粗野さが苦になりはじめる (p. 777) ところあたりにあるとみれば、さきほどふれた Edmund Wilson の解釈もうなずけるのであるが、いずれにしても彼女の “意識の流れ” の最後は、したがって Ulysses の最後は主として Hawth Head で Bloom に求婚され、

27) Levin, p. 131

28) Tindall, p. 36



それを承諾したときの美しい追憶によって閉じられるのである。

これを概括すれば、温和なる Bloom, そしてそうした彼にふさわしい温和で微妙な勝利のしかた (Joyce が *Odyssey* の最後があまりに血なまぐさいのを *Ulysses* にそぐわないとみていたことはよく知られている) の印象が強いのであって、すでにふれた彼の性格——とくに〈凡人〉としての側面——をさらに確認したことになる。

ところで、Bloom の妻である Marion はもちろん現実の一女性ではあるが、また、もっと原初的・宇宙的な存在——いわゆる“永遠の女性”または“大地の母”に近い存在——にもなっている。そのことは、現代の〈凡人〉Bloom が同時に〈普遍人〉の要素もかねそなえるものとされていることと同様であるが、Marion の場合にはもっとこの普遍的な女性像という感じをあたえることが強いようにおもわれる。それは彼女の場合には、現実の details による肉づけが比較的閑却されていて (彼女は作中で Bloom ほどの力点をおかれていないから当然なのだが)、彼女の印象はあの第18挿話の不定形の“意識の流れ”からくるところがもっとも多い、という事情によるのであろう。ひとりひとりが“everywoman”の要素を強くもっている——一般に男性が“everyman”の要素をもっているよりもはるかに強く——というのが女性の特質であることからすれば、この Joyce の Marion のとりあつかいは容易に正当化されるであろう。

こうして、*Ulysses* という作品は、そのなかに出てくるあらゆる要素が、Bloom や Stephen にかかわることも、葛藤や矛盾も、すべて最後にはこの善悪も超越した永遠の大海のような Marion の内面世界のたゆたいのなかに流れこみ、溶かし去られる、という構成になっている。葛藤や矛盾がそこで解決されているというのではない。Marion に体现される原初の生命のなかにそれらはむしろそのまま還されるのだ。歴史はここからまたはじまるというわけであろうか。のちに *Finnegans Wake* の重要な柱のひとつとなるべき歴史の循環

の観念が、やや不分明な形ながら、ここでもすでにあらわれているのをわれわれはみるのである。こうした、全体としての循環の印象、完全に1サイクルを経たという印象はまた、〈普遍〉というテーマとよく調和しあい、というよりはむしろ、〈普遍〉のテーマを強調するのに役立っていることにわれわれは気づく。〈普遍人〉Bloom という印象はこうした全体の自己完結的な構成にささえられてなりたっているものでもあるのである。

かくて Marion は、作中において、Bloom の〈凡人〉としての側面と〈普遍人〉としての側面の両方にそれぞれ寄与するところがあるのである。

さて、これら *Ulysses* 中の主要登場人物を総括して、Tindall は、

If we take Mrs. Bloom and Stephen and combine them with Mr. Bloom, we compose something like ideal man. Mrs. Bloom is his feminine flesh, Stephen his male intellect and imagination, and Mr. Bloom all that lies between these extremes. That the ideal figure will be closer to Mr. Bloom than to the others is a tribute to his humanity.<sup>29)</sup>

と言っているが、これはほぼそのまま受け入れているであろう。かくて Bloom-Stephen-Marion という“Trinity”が成立して、それが Tindall のいうように“ideal man”を構成するとすれば、そして Bloom はその“Trinity”の一メンバーにしかすぎぬとすれば、〈普遍人〉としての Bloom という肩書にはいささか欠落があることになる。しかしこれも当然のことであろう。“Ideal man”としての像——真の〈普遍人〉としての像とでもいおうか——は、現実の一個人のうちに定着されうるものではないからである。Bloom がいかにそれに近かろうとも、これほどに手がたいリアリズムの手法をも利用して、これほどにもリアリスティックな諸細目を賦与されたリアルな一個人が、完全なる意味における“ideal man”

29) Tindall, p. 38



になりえぬことはあきらかであるからである。そして Bloom のうちでこの “ideal man” にはなりえぬ諸特性は、〈凡庸人〉という範疇におさまるのではないだろうか？ そのようにかんがえるとき、Bloom は〈凡庸人〉と〈全面人〉あるいは〈普遍人〉という “double (あるいは triple) aim” を追求した結果としての創造物であるという視点の有効性をたしかめうるようにおもわれるのである。

#### 4. 〈普遍〉への志向

最後にわれわれは、さらにもう一步視野をひろめ、*Ulysses* と Joyce の他の主要な作品との関係を概観して、〈凡庸人〉のテーマが Joyce の文学全体のなかでどんな位置をしめ、どのように発展しているのかをみることにしよう。

まず、*Dubliners* について。

Bloom のモデルのうちもっとも有力なひとりとして Hunter という人物がおり、Joyce は最初はこの Hunter 氏を主人公にして ‘*Ulysses at Dublin*’ という題の短編を *Dubliners* の 1 編として書こうとしたことがあったことはすでにふれた。このもくろみは結局タイトル以上にはすすまなかったことを Joyce 自身語っているが、それはつまり、このタイトルによってもうかがわれる壮大な意図がとて 1 編の短編小説のなかにおさまりきれぬものではなかったからであろう。この計画が結局は *Ulysses* となって結実したわけであるが、このことから *Dubliners* と *Ulysses* のあいだには非常な類縁関係がみとめられることは予測できる。両者はそのなかに描く場所（ダブリン）をおなじくし、そこに描く時もほぼおなじころとみてよい（*Dubliners* のなかの時はある程度の幅をもち、またたしかめることもむずかしい場合が多いが）。そして両方に同一の人物が何人かおなじ名まえで登場することは周知のとおりである。たとえば、‘Grace’ において酒におぼれている Tom Kernan、彼を助けようと夫人と結託して彼を教会のもよおしにひっぱり出す友人たち Mr. Power, Mr. Cunningham, Mr. M’Coy はすべてそのまますの名で *Ulysses* のなかに minor

characters として登場する。また ‘The Boarding House’ の主人公である Mr. Doran は *Ulysses* でも話題にのぼるし、‘Two Gallants’ の Lenehan は *Ulysses* でもかなり重要な役を演じている……といった具合である。

ところで、こうした *Dubliners* に登場する人びとは全部〈凡庸人〉であるといえる。それぞれにことになった個性と生活と運命をもっているとしても、彼らはいわゆる “hero” ではなく、平凡・凡庸で無名な市井人たちである。かくて、Joyce にあっては、その文学的しごとほとんど最初から、〈凡庸人〉に対する興味と関心が中心的な役割をはたしていたといえるのである。

そして *Dubliners* はダブリンに住むこれらの〈凡庸人〉たちの生活の種々相を描いた作品であるのだ。それは、よく言われるように「幼年期」、「青春期」、「成熟期」、「社会生活」といった相にわかれているとみてもよいし、「死」、「愛」、「性」、「宗教」といったふうにテーマ別にしてかんがえてもよからう。これによってダブリンの人びとの生活の種々相をつくそうという意図は Joyce には最初のうちはなかったかもしれないが、何編か書きつぐうちに次第にそうしたことが意識的にめざされるようになったのでもあろう。いずれにせよこの作品が偶然に書きためた作品をそのまま一さつにまとめたのではなく、その底にはある意図があったらしいことは、“a chapter of the moral history” (of Ireland) を書こうとしたという Joyce 自身のことを待つまでもなく、だれの眼にもあきらかである。そしてこの意図は、〈普遍〉をめざす志向、と言ってもいいのではないか。ダブリンという一都市に普遍的な意味をみる Joyce の態度はすでにあきらかなのだが、ただ *Ulysses* との比較において無視できぬ重要な点は、Joyce のこの *Dubliners* における〈普遍〉への志向はまだ萌芽的なものであったということ、そしてそれがまだひとりの人物のなかに体现されることはなかったということである。Bloom の原型たる Hunter 氏はもし作品化されることがあったとすれば当然 *Dubliners* 中の〈凡庸人〉たちと同列にあったはずで、この Hunter 氏から Bloom への成長はじつに驚嘆す



べきものがある。*Dubliners* 中の登場人物たちはまさに現実の〈凡庸人〉そのものであって、けっしてそれ以上のものではないが、*Ulysses* の主人公は、すでにみたごとく、じつに大きなひろがりをもった〈普遍人〉でもある〈凡庸人〉なのである。

さらに、手法の点でも全体のふんい気の点でも、*Dubliners* から *Ulysses* への発展はすべて単調から多彩・多様への発展である。おなじく〈凡庸人〉をとりあつかっても、前者はほとんどつねに暗く陰うつであり、後者のもつような笑いはない。前者の背後に狷介な青年——しかし、おどろくべく老成した青年——のシニクでつめたい眼がうかがわれるとすれば、後者の背後にはよりゆたかに幅ひろく成熟した芸術家の眼がある。こうした発展は、つぎにのべる偏狭・単調な Stephen から多様・変幻の Bloom への発展と軌を一にするといえるであろう。

つぎに *A Portrait of the Artist as a Young Man* について。

前節で Stephen を論ずるとき、われわれは便宜上視野を *Ulysses* のなかだけにきざったが、この Stephen は *Ulysses* における主要な登場人物のひとりであるだけではなくて、*A Portrait* の主人公でもあることはいうまでもない。ひとりの人物 (Stephen) の幼少からの精神形成のあとをたどって、彼が宗教と芸術の相剋を克服して芸術をえらび、芸術家たる使命をまっとうするために故国を脱出するまでを描いた一種の自伝小説がこの *A Portrait* であった。

ところで、*A Portrait* と *Ulysses* の2つの作品における Stephen にかかなりの差があることが指摘されている。それは、*A Portrait* の最後と *Ulysses* の “Bloomsday” とのあいだに2ヶ月とちょっとの時の経過があつて、その間にパリへ逃げ出した Stephen は母危篤の電報で故国へよびかえされ、さらにその母をうしなっているという事情があつて、*A Portrait* の最後で “Welcome, O life! I go to encounter for the millionth time the reality of experience and to forge in

the smithy of my soul the uncreated conscience of my race....Old father, old artificer, stand me now and ever in good stead.” と書きのこして意気さかんに出発した彼が、いまや挫折したにがいおもいをかみしめているといううちがい——それはそれで大きいのだが——にとどまらない。Stephen をながめる作者の眼自体がちがっているのである。

*A Portrait* で主人公であった Stephen は *Ulysses* においてはそうではない。すくなくとも唯一の主人公ではない。Stephen と Bloom のうち、中心はむしろ Bloom のほうにある。*Ulysses* 執筆中の1919年に Joyce が言ったとつたえられることば——“Stephen no longer interests me. He has a shape that can't be changed.”——はそのことを端的にしめしている。*A Portrait* においては Joyce は Stephen をほとんど自己と同一視しており、いわば“全力投球”によって彼の像を描いたのだが、*Ulysses* では彼をかなり detach された余裕のある、むしろ皮肉な光もまじった眼でながめているのである。

Stephen の内面の発展をあとづけた小説である *A Portrait* において、Joyce はすでに、芸術的素材としての Stephen をほとんど使いつくしてしまっているのだ。*Ulysses* の Stephen は一種の anticlimax であるという印象をわれわれは否定しえない。Joyce はそこでさしずめ“敗戦処理”をおこなっているのである。Stephen はすでに Joyce の全面をおおいうる存在であることから遠く、前節でみたようにたかだか Joyce の両極端のひとつ——それも見すてられつつあるほうの極——であるにすぎないのである。Joyce は Stephen を脱却してどこへすすむのか？ いうまでもなく Bloom の方向へである。孤高狷介で個人主義的な芸術家 Stephen から〈凡庸人〉Bloom へ——それが Joyce の精神のたどった道筋であった。

Bloom とともに Joyce の作品にくわわった新要素は、要するに多面性・包括性・普遍性への志向であった。そして普遍とは歴史的な時間の超越であることをかんがえるとき、*Ulysses* の非時間



性ともいふべき性質もよく理解されるとおもわれる。Stephen が主人公である *A Portrait* が時間的な推移を基軸として構成されているのに対して、Bloom が主人公である *Ulysses* が時間的にはただの1日（未満）のひろがりしかもたず、むしろ空間的なひろがりを基盤にしてなりたっているのは、非常に暗示的である。*A Portrait* を川とすれば、*Ulysses* は海にたとえられるであろう。Stephen をはこんできた川の流れはいまやひとつの極限に到達してそこでおしとどめられ、そのエネルギーを今度は空間的にひろがらせることになる。そこに生れたのが *Ulysses* なのだ。いずれにせよ、Bloom が時間的な基軸のうえに発展するというよりも、空間的な基盤にそってのひろがりをみせる人物であることはたしかである。そこにあらわれる多面性・包括性——それが彼の〈普遍人〉としての側面でもあるのである。こうした〈普遍人〉を主人公にしては、*A Portrait* のような時間的な推移が中心になる Bildungsroman は成立しがたいであろう。

*Dubliners* や *A Portrait* から *Ulysses* へのこうした発展は、その後ひきつづく *Ulysses* から *Finnegans Wake* への発展を考慮に入れるとき、ますますその意味が鮮明になってくる。周知のように、*Finnegans Wake* の主人公 HCE は現実の世界においてはダブリン西郊 Chapelizod の居酒屋の主人 Humphrey Chimpden Earwicker であるが、彼は同時にアイルランドの民間伝承中の左官屋 Finnegan でもあり、伝説中の英雄 Finn MacCool でもあり、さらにはコンテクストによってはアイルランドへ侵入する Cromwell や Napoleon でもあり、等々、さまざまなすがたをとる。要するに彼 HCE は Here Comes Everybody であり、Haveth Childers Everywhere であって、まさに〈普遍人〉そのものである。Bloom の characterization をすでに大きく規制していた〈普遍〉をめざす Joyce の志向が、この *Finnegans Wake* では存分に発揮されつくしたといつてよい。

かくて Joyce の小説の主人公の変遷は、概括

すれば、狷介な個人主義的芸術家 (Stephen) から〈凡庸人〉Bloom を経て 始源的普遍的人間像 (HCE) へという道をたどっていることになる。あるいは Hunter (*Dubliners* の登場人物たちの象徴として)——Bloom——HCE という経路も考慮に入れるべきであるかもしれない。Joyce は作品の数のうえでは寡作であるだけに、その全作品はきれいな発展のパタンのなかに位置づけられるのであるが、うえの2つのいずれの経路にも〈普遍〉への志向の強まりをみることができる。Bloom という人物はこうした変遷経路の中間項としての位置をしめるのであって、そうした微妙な位置における現実と 普遍——〈凡庸人〉と〈普遍人〉——の混淆・融合が彼の性格のさまざまなナゾの源泉なのである。

Joyce において〈普遍〉をめざす志向はこれほどにも強かったのだ。これは Joyce の最大の特徴ともいえるものであって、いま最後にもう一度 *Ulysses* にもどることにすれば、そこにもおなじ志向のあらわれはいくつも指摘することができる。それは〈全面人〉をめざす志向、全体を包含しようとする志向としてもあらわれるであろうが、この作品中のあちこちにみられる百科辞典的知識の羅列はその一例となろう。たとえば第12挿話にはアイルランドの特産物や名所や聖人の名まえなどがそれぞれ半ページから1ページにもわたって列挙されているのがみられるし、さらにたとえば第17挿話には、“What in water did Bloom, waterlover, drawer of water, watercarrier returning to the range, admire?” の項目のもとに、水の特徴が百科辞典的(?)に列挙されている。こうした個所は無数にあるのだが、あるところではかならずしもコンテクストの必然からそうになっているというのではなく、むしろ自分の該博な百科辞典的知識をすべてこの作品中にたたきこもうとする Joyce の偏執的な意志の印象のほうが強いことが多い。Joyce には “documentary demon” がついていると評した G. B. Shaw のことばも一面の真実をついている。この “documentary demon” とは “〈普遍〉への志向” の別名であらう。*Finnegans Wake* の *Anna Livia Plurabelle* の章を



執筆中の Joyce が、ある日友人にむかって、きょうはそのなかに川の名を何百書きこんだ、と得々と語ったとかいうエピソードを、われわれは思い出すのである。Bloom の characterization にあたって、彼をあらゆる角度からながめ、描き出そうとしたのも、うえにのべたような志向をもった Joyce にあっては至極当然なことであったといわねばならない。

#### あとがき

現代が〈凡庸人〉の時代であるとすれば、Bloom はまた典型的な現代人である。Joyce は *Ulysses* において現代の〈凡庸人〉を描ききった。今後これ以上の〈凡庸人〉への肉迫がいかにして可能であるのか、想像がつかないほどである。その意味から Joyce はいまなおもっとも現代的な作家であるという光栄をもつのである。

そしてこの *Ulysses* にあっては〈凡庸人〉のテーマが文学的になんと豊饒なものとされていることだろう。この小論はその豊饒さをひからびた形でしかとらえられない結果になったかもしれないが、*Ulysses* という創造の偉大さがあらためておもわれるのである。

この小論ではできなかったが、〈凡庸人〉のテーマの意味を十分にとらえるには、それを小説の発展史のなかにおいてみること、さらにひろく歴史あるいは社会史との関連において精神的意味をかんがえることが必要であろう。

最後に、“mass”の時代という様相がますます深刻化してゆく現代にあって、〈凡庸〉の問題もますます大きな重要性をもって浮びあがってくるのが予想できることを指摘しておきたい。

(1968年12月)